有形文化財（絵画）

１１．絹本着色十六羅漢図　１幅

■指定年月日　昭和 46 年 12 月 10 日（1971）
■寸　　法　縦 98.3㎝　横 50.0㎝
■所　在　地　宝立町鵜飼 1-1
■所　有　者　妙厳寺

羅漢は、小乗仏教においては、修行の完成者で功徳の備わったものとして仰がれるが、中国・日本に伝わった大乗仏教では、如来・菩薩になる前の修行者である声聞として説かれる。阿羅漢ともいう。正法護持の修行者の群れとも見なされ、『法住記』では、釈迦は、16 人の大阿羅漢に勅命して、仏滅後も永くこの世に住し、衆生を済度せよと託したとする。第一尊者である賓頭盧尊者は、病気平癒の故事により、独立して安置されることがある。

羅漢図の像容は、大きく唐風と和風に分かれ、妙厳寺蔵品は、唐風の特色を示し、13 世紀後半、中国宋末か元の初めごろに描かれたものとみられている。美しく細い線で輪郭が描かれ、部分的に淡彩が塗られている。背景に山水を描いた例は珍しく、表情・衣装などの描画法は個性的で、特に松の描き方には特色がある。

絹布の縦糸・横糸の太さ、織り具合いの粗密さなど、絹の織布技術史を知る上でも貴重な資料である。

応仁２年（1468）に妙厳寺３代住職になった玄慶が入手したとの伝承がある。本来は２幅一対であったが、明治末に１幅を失ったという。